

オイスカ精神を胸に 母国の青年育成に励む



ダルマント Darmanto



インドネシア

オイスカ・カラングニアル研修センター副所長

- 四国研修センター(1988年/農業一般)
- 西日本研修センター(1993年/農業指導)

私は、オイスカが創立された年にカラングニアル県の農家に生まれ、幼い頃から両親を手伝い、農作業にそしんできました。地元の農業高校卒業後には、農業への旺盛な知識欲を満たすため、カランバンダン郡農業普及所による農業研修に参加。この研修は、同普及所の所長で西日本研修センターの研修生OBであるムルヨノ氏により実施されたもので、後にこの研修プログラムは、カラングニアル研修センターの取り組みへと発展しました。

私は、当時ジャカルタにあったオイスカの研修センターでも農業研修を修了し、1988年に訪日研修生として、四国研修センターで学ぶ機会に恵まれました。帰国後は、開設されたばかりのカラングニアル研修センターの職員として後進の指導に従事し、現在に至ります。また、93～94年にも西日本研修センターで農業指導の研修に参加し、2度の訪日研修で身につけた労働倫理と農業技術を糧に、これまで30年以上にわたり、インドネシアの青年の育成に懸命に取り組んできました。

今、世界中で新型コロナが猛威を振るう中、カラングニアル研修センターでも研修業務の休止を余儀なくされていますが、一日も早く終息することを願いつつ、オイスカ精神で乗り越えていきます。

オイスカ創立60周年、誠におめでとうございます。OISCA JAYA! (オイスカ万歳!)



四国研修センターにて



西日本研修センターにて

OISCA OBからのメッセージ

に取り組んできました。これまでの訪日研修生も現在5000名を超え、OBたちを中心に、た訪日研修生OB4名に、活動への思いや60周年へのメッセージを聞きました。

タイの発展のために 今も変わらない思い



ソンボン Sompong Jowsen



タイ

オイスカ・タイ 北部タイ地域責任者
チェンライ県メースアイ郡 ウィエンスワイ地区区長

- 四国研修センター(1992年/農業一般)

私は、1992年1月から93年3月まで、タイの代表として四国研修センターで研修を受けました。最初は言葉が分からず、日本語での講義やコミュニケーションに苦労しましたが、日本で学んだことや経験したことを母国の兄弟姉妹、子どもたちに伝え、タイの発展につなげたいとの思いで、必死で頑張りました。徐々に日本語が分かるようになってからは、講義も理解でき、ほかの国の研修生たちと楽しく会話や意見交換をすることができました。分かることが増えたことで、感動することも多くなりました。

また研修では、特に日本人の友好的な性格が印象に残りました。どの研修生にも親しみをもって平等に接してくれ、生活や体調を心配したり、声をかけたりしてくれました。心が温かくなり、安心しました。短い間ではありましたが、センターや徳島県農業協同組合で、農業や環境について学び、ホームステイを通して日本の文化や暮らしを体験することもできました。

帰国後は、オイスカ・タイのスタッフとなり、現在もタイ北部での森林再生プロジェクトや環境保全の指導を行っています。訪日研修をはじめオイスカで学んだことは、とても大切な財産として、今でも私の中に息づいています。オイスカ60周年、チャイヨー(万歳)!



四国研修センターにて

有機農業との出会いと日本人のあたたかさ



エザニ Mohd. Ezani Bin Mahmud



マレーシア

元農業省職員(今年6月に定年退職)

● 西日本研修センター

(1995年/農業一般、2001年/国際ボランティア)



自宅で奥さんと。「退職してからは家族との時間を大切に過ごしています」

私は1995年と2001年に、西日本研修センターで研修を受けました。研修の中で一番印象的だったのは、有機農業との出会いです。有機農業はマレーシアにおいて、とても重要なものでした。

また、私の初めての訪日研修で、終始とても親切で温かい歓迎を受けたことも、印象に残っています。日本人がお互いを気づかいながら生活すること、そして、外国から来た私たちにも同じように接してくれることに、素晴らしいさを感じ、とても恵まれた滞在であったと思います。この日本人の温かさや、私も研修で身につけることができた日本の勤労精神や規律が大好きです。機会があれば、また日本に行きたいです。

オイスカは1961年の創立以来、多くの人々に恩恵を与えるとともに、マレーシアという国に貢献してきました。今やオイスカは私たちの国の宝の一つであり、これからもずっとそうあり続けてくれると信じています。今後のオイスカのさらなる発展を願っています。

TOPIC

オイスカと同級生!

1961年生まれの研修生

オイスカは創立以来、主にアジア太平洋地域で農村開発や環境保全活動、そしてそれらを担う人材の育成各地でオイスカ活動の輪が広がっています。オイスカが60周年を迎える今、オイスカと同じ1961年に生まれ

オイスカでの日々を糧に



ルーベン Ruben A. Dulagan



フィリピン

農業省コーディネイタ地域事務所 規制部門担当部長

● 西日本研修センター(1992年/農業一般)

● 中部日本研修センター(1999年/イチゴ栽培)

当時農業省の職員だった私は、1992～93年の約15ヵ月間、西日本研修センターで農業を学びました。新幹線に乗ったり、雪遊びや桜の下で踊ったりしたことも含め、研修を通して得たたくさんの素晴らしい経験は、いつも私の成長の糧になっています。

来日当初、センターの“お母さん”である東さん(はっきりと顔を覚えています)が私に話しかけてくれた時、日本語が分からずに答えられなかった苦い思い出があります。ほかの研修生も同じだったようで、最初、センターは静かでした。しかし猛勉強を経て、皆が日本語を話せるようになってからは、とても賑やかになりました。語学の習得という困難を乗り越えたからこそ得た、貴重な体験でした。また、佐賀県の鳥越さんの家にホームステイし、柑橘類の生産に関する2ヵ月間の研修を受けたほか、99年に再来日し、イチゴの栽培についても学びました。豊富な経験に基づいた一流の指導をいただき、良い経験となりました。研修修了後は、訪日研修を通して身につけた規律や農業の原理、技術を基礎に、農業普及員としての経験を積んできました。現在、事務所での業務に当たる傍ら、ベンゲット州での養蚕プロジェクト立ち上げにおける桑の苗栽培に関する支援など、オイスカ活動にも携わっています。

今日の私があるのは、日本でお世話になった多くの方々のおかげです。これからも、オイスカが変わらず使命感をもって活動を続けてくれることを期待しています。60周年MABUHAY!(万歳!)



訪日研修の仲間たちと



研修を受けた佐賀県で